

九州国立博物館
紀要「東風西声」第20号 抜刷
2025（令和7）年3月

【調査ノート】

パキスタン、タキシラの仏教遺跡群

小 泉 恵 英
打 本 和 音



原色図版21 ダルマラージカー大塔



原色図版22 主塔B涅槃像(1)

【調査ノート】

パキスタン、タキシラの仏教遺跡群

小 泉 恵 英
打 本 和 音

はじめに

パキスタン北部の都市タキシラは、古代の東西交流の要地にあつて、西洋文化を受容した都市遺跡群に加え、仏教隆盛の折には一大寺院コンプレックスを形成した。現在は、世界遺産に登録される一方、重要な軍事拠点としての機能を併せ持つ。タキシラの各遺跡は、インドの英国統治時代にその存在が確認され、20世紀前半にJ・マーシャルが大規模かつ広範な発掘調査を実施した（Marshall 1951）。

執筆者両名は2024年11月1 - 9日、パキスタン現地調査の機会を得た¹。小泉は1990年代に同国連邦政府考古局と共同してハザーラ地方の遺跡踏査、仏教寺院址ザールデリーの発掘を行なったことがあり、当時タキシラの各地についても関連調査を実施した。今回、未調査だった遺跡への訪問が叶った他、近年の発掘調査による新発見などもあり、最新成果の紹介と現状の記録を目的に調査ノートの形でまとめておくこととした。

本稿では、打本が代表的な遺跡の概要と現状の紹介、小泉がバマール遺跡の近年の考古学調査の成果と若干の考察を述べてみたい。

1 タキシラの仏教遺跡群（打本）

都市遺跡

今回の調査では、タキシラの4つの都市遺跡のうち、ビールマウンド、シルカップ、シルスフを訪れた。

なかでも、第三都市とされるシルカップ Sirkap（図u1）は、1912年にマーシャルの監督下で発掘が開始されて以降、順次調査・考察が進められてきた大規模な遺構である。南北にはしる大通りの左右には碁盤の目状に街並みが広がり、規則的な都市計画のもとに造営が進められたことを示す。また大通りに面して、双頭の鷲ストゥーパやアプシダルテンブルなど特徴的な宗教建築も確認できる。

シルカップ遺跡の南端はハティアル丘陵に接し、その上部にある通称クナーラ塔 Kunāla が目視できる。

クナーラ塔についても調査予定としていたが、近年観光客が盗賊に襲撃されたことを受けて封鎖さ



u1 シルカップ 南北に走る大通り
(北辺より)

れており、登頂は叶わなかった。なお、クナーラ塔なる通称は、玄奘が『大唐西域記』でタキシラの仏塔として紹介する三塔のうち、アショカ王の太子・クナーラが継母に目をえぐり取られた故地に建つ塔（大正蔵51, No. 2087, 885a）を指すとマーシャルによって比定されたことが由来である（Mashall 1918: 59-60）。ただし、その比定については今後に修正の可能性も指摘される（内記2021; 2023）。

シルカップからタムラー・ナーラー川を越えて南西に約2 kmの地点には、第一都市とみられるビールマウンド Bhir Mound（図 u 2）が広がる。1913年にマーシャルによって発掘作業が開始されたのを皮切りに、以後断続的な調査が行なわれた。現在は公園として整備されたビールマウンドの北には1928年に開館したタキシラ博物館が建っており、タキシラ周辺域の遺構から出土した品々が収められる。

一方、タキシラにおける最後の都市遺跡と目されるシルスフ Sirsukh（図 u 3）は、シルカップからは北東に3 kmほどの地点に位置する。クシャーン朝期の建設と考えられており、1915-6年に小規模な発掘作業が行なわれて以後は目立った調査は実施されていない。筆者らが訪れた際には、遺構は草木に覆われて細部の確認が困難な状態であったが、当遺跡の特徴である堡壘を伴う城壁跡は目視することが出来た。



u 2 ビールマウンド
遺跡西側より北東を望む



u 3 シルスフ城壁址

仏教遺跡

かかる都城址の周囲の丘陵には、仏教に関わる数々の遺構が点在する。今回の調査では、ダルマラジカー、ピッパラ、モーラ・モラードウ、ジャンディアル A・B、カラワーン、ギリ上・下、バマラ、バタルプール、ジナンワリデリ、シャーアラディッタ、マーニキヤラ、ジョーリアンといった遺跡を訪れた。これら遺跡の大部分はマーシャルの監督のもとに発掘が実施され、その後も様々な国や組織によって調査が引き継がれて現在に至っている。

こうした豊富なタキシラの遺構について、マーシャルは石積法による編年を提唱している。彼の与えた年代観については様々な異論も出ているが、石積法に着眼する手法はタキシラにおける相対年代を知るための最も有効な手段として後の研究者にも受け入れられ、各遺構の先後関係について検討が加えられてきた（桑山1974; Behrendt 2004など）。以下に石積法の特徴を簡略に整理しておく。

野石積 Rubble Masonry: 大き目の石を並置してその間を小石で埋める方法であり、小石の大きさや形状は自由度が高い。このタイプの特徴を有する仏塔はタキシラにおける最初期の仏教建築といえ、仏塔内部を野石積、外面に現地で産出する多孔質石灰岩であるカンジュールを組み合わせるのが通例とされる。ただし、それらは紀元後25年ごろの大地震によって殆どが倒壊したと考えられ

ている。

ダイヤパー積 Diaper Masonry：地震後の復興期に導入されたとみられる方法で、地石の高さがある程度合わせ、その間を厚さの均等な薄い石を積んで埋める。この石積法は、当初マーシャルによって、時期を経るにつれて地石が大きくなる傾向が指摘されていたが、カラワーンでの発掘を経て、地石が大きいものが古く、小さいものがより新しいと編年が訂正された (Marshall 1951：248)。野石積からダイヤパー積への変化は、シルカップの末期ごろ（1世紀）にあたるとされる。

半切石積 Semi-ashlar Masonry：地石と詰石の間にレンガ状の切石の層が挿入される。時代の降下とともに切石層が一層から二層、三層へと変化する。

以下では、マーシャル (Marshall 1951) のほか、こうした石積法に着眼しつつタキシラの寺院建築の伽藍配置や編年について検討した桑山正進 (桑山1974；2003) 等を適宜参照し、今回訪れた主たる遺構について紹介する。

ダルマラージカー Dharmarajika (原色図版21、図 u 4)

最初期の野石積の形式を遺構内に残す重要な寺院址として、ダルマラージカーが挙げられる。シルカップの南東 2 km ほどのタムラー・ナーラー溪谷の北辺の丘陵に位置し、タキシラの仏教伽藍の中でも最大規模を誇る。発掘区域の南西側は、大塔とそれを取り囲むように小規模な祠堂遺構が林立する区域となっており、大塔の北東には僧院が立ち並ぶ区域が広がる。



u 4 ダルマラージカー大塔

創建がアショーカ王時代に遡るとされる大塔は、数世紀にわたって増広が繰り返され、現在の塔は円形基壇に円筒部、覆鉢を有する。塔の中核は中心から車輪のスポーク状に16の区画に分ける形で壁が築かれ、その内部を石積で充填する。また、四方にはのちに増設された階段がある。このうち、平面円形基壇部にのみ野石積の箇所が確認でき、それより上の部分は半切石積による補修であることから、紀元後25年ごろの地震を受けて当初の大塔の大部分が倒壊したとみられている。また、大塔の西側に南北一列に並ぶ建物群、そして大塔北側の僧房にもそれぞれ野石積の遺構が含まれる (桑山 1974：331-2)。

ところで、本遺跡の中でも最も新しい時期に建てられたとみられる僧院 (Court J) から発見された、殺害の痕跡を残す6体の人骨と、その後に起きた火災を伴う崩落の痕跡、また、同一層から発見された貨幣などを根拠に、ダルマラージカーは5世紀後半に西北インドに侵入したエフタル White Hun によって崩壊に追い込まれたと判断され、広く受け入れられてきた (Marshall 1951：287)。ただし、マーシャルの調査報告書の再検討の結果、この虐殺はエフタルによって引き起こされたとは考え難く、別の要因で6世紀中ごろ以降に寺院関係者らが殺害され、僧院が焼き払われた可能性が指摘されている (桑山1990：131-149、内記2021：224)。

また、この大規模な仏塔を、7世紀に玄奘がタキシラを訪れた当時、既に廃寺となっていた「宝蔵塔」に比定する仮説が近年提出されており、ダルマラージカー大塔の位置づけについて新たな解釈が示されている (内記2022；2023)。

カラワーン Kalawan (図 u5)

タキシラ最大規模の伽藍のひとつとして知られるカラワーン遺跡は、同じく広大な規模を誇るダルマラージカーの北西、マールガラ山脈の一角に位置する。現在は軍用地に囲まれていることからアプローチは困難であり、現地関係者の協力を得て実見が叶った。調査時には遺跡全体に灌木が繁茂し、遺構の詳細な確認が困難であったため、マーシャルの平面図をもとに残存遺構の状態確認を行なった (Mashall 1951: 322-341)。

北向きのテラス状台地に展開する本遺構は、ダルマラージカーのような大規模な主塔は確認されていない。代わりに、遺跡の中央部に3基の中程度の仏塔が東西に横並びで配され、現地では辛うじて基壇部等が目視できる状態にあった。仏塔群の東側には八角形と方形の内陣をもつチャイティヤ堂がある。このうち、前者のチャイティヤ堂に安置された仏塔からは、舍利容器とともにカローシュティー文字で書かれたアゼス134年銘のある銅板が発見された (塚本1996: 971-2)。銅板には、ある優婆夷が Chaḍaśīla における祠堂内の塔に舍利を奉安したこと、それが説一切有部の規範師たちの所領であることが記されており、当地が古くはチャダシラーと呼ばれていた可能性と、説一切有部の所領であった時期があることを示す。

3基の塔の南側には山肌を背にして3つの僧院が並ぶ。東と西にはそれぞれ、中庭を囲んで多数の僧房を持つ正方形プランの僧院が、その間を長方形の僧院が埋める。また、屋根として利用されていたとみられる大量の炭化した木材と薄型の半分焼けた粘土が床面から検出されたとマーシャルが報告していることから、当地でも火災等が起きた可能性が伺える。

ギリ Giri

カラワーンから南東へ、アップダウンの激しい細い道を抜けるうち、巨岩がいたるところに転がるギリ溪谷に行き当たる。ギリ遺跡は溪谷東上部の台地と、そこから見下ろした西側の麓にそれぞれ存在する (Marshall 1951: 342-347)。

マーシャルはギリを、5世紀末ごろのエフタルの攻撃を避けて逃れてきたダルマラージカー等近隣の僧院に住む僧侶たちの疎開先として建てられたものと推測した。先述のとおり、エフタルの攻撃とその因果関係は首肯しがたいが、両遺跡は水源にも恵まれ、長期の滞在地としての条件は満たしているように思われる。

まず低地の高台にあるギリ (図 u6) は、北側に仏塔、南側に長方形に僧院があったとみられる。ただし、マーシャルの調査の段階で仏塔はその4分の3以上が洪水によって押し流されていたようで、現在も、復元作業等が積極的に行なわれているとはいいいがたい。

低地のギリから東側へ緩やかな上り坂を道なりに進



u5 カラワーン
南西の僧院東壁から北西を望む



u6 ギリ (低地) 北側より僧院を望む

むと、道の丁度半ばほどで湧水を得られるエリアがあり、そこからさらに上ると高地のギリに行き当たる（図 u 7）。小道を登り切った先に南北に長い台地が広がり、小道のある北側に規模の大きな方形の仏塔の基壇部が残る。南側には20ほどの小部屋を持つ菱形に近い方形の僧院址のほか、仏塔と僧院との間には本来中庭のような役割であったとみられる状態の良くない遺構が残る。

台地の南側と東側には雄大な嶺がそびえるが、西側は崖状で、僧院の南西側の位置から見下ろすと低地のギリが目視できる。



u 7 ギリ（高地）
南の僧院より北の仏塔址を望む

ジナンワリデリ Jinnan Wali Dheri（図 u 8）

シルカップから北東に約7km、バダルプル仏教寺院群から続くプンジ・カット・ロード（Punj Katta Rd）沿いのハロ川左岸に位置するジナンワリデリは、1947年のパキスタン分離独立以後に調査された遺跡の中でも、最もよく保存された仏教僧院群のひとつである。

パキスタン連邦政府考古学博物館局の指揮のもと、2002-8年にかけて実施された調査では、東西約100m、南北約75mの遺構が確認された。遺構西側の主塔のほか、主塔に面した礼拝堂や僧院などが発見されるなど、多くの成果を上げており、なかでも、主塔に通じる僧院回廊からの壁画断片の発見は特筆される。現在タキシラ博物館で保管される壁画は、多くが損傷甚だしいが、隈取りの技法などが確認できる良好な資料も含まれる。



u 8 ジナンワリデリ 主塔（南より）

なお、かつてタキシラ一帯の博物館や遺跡は連邦政府考古局の管理下にあったが、2010年以降の地方分権化政策による一連の権限委譲により、パンジャーブ州とカイバル・パクトウンクワ州にそれぞれ管理が移った。当該遺跡はカイバル・パクトウンクワ州考古局の管理下に入り、引き続き調査が進められている（Waqar & Ullah 2018）。

マーニキヤラ Manikyala（図 u 9）

イスラマバーードから南南東35Kmほどに位置するマーニキヤラは、四面に階段付きの方形基壇を持つ大塔と、その周囲に小塔と僧院がある。大塔の覆鉢部には度重なる増広の痕跡が見られるとともに、都度の奉納物も確認されている。特に、その古層からは、カーピシーの太守による寄進銘が付された円筒形の青銅製舍利容器や、カニシュカ1世、フヴィシュカのコインなどが入った箱が発見された。それらの出土地点よりもさらに深い地点にオリジナルの仏塔の痕跡が見られることから、大塔は2世紀後半以前に建立されたと考えられている（Errington 2012：121-126）。

我々が訪問した際は、大塔の北側を中心に韓国・パキスタン隊による発掘が進められていた。政

府開発援助（ODA）の一環として位置づけられた事業ということで、韓国とパキスタンの大学生も発掘に加わり、国際交流と同時に次世代の研究者の育成が行なわれていた。韓国はイスラマーバード博物館の整備についても援助に加わっており、諸外国との国際協力による遺跡や博物館の整備が積極的に進められている印象を得た。

以上、紙幅の都合上、特に注目すべき遺跡に絞って紹介した。コロナ禍を経て、順次発掘や調査が再開した遺跡や、今回は訪問が叶わなかったが、連邦政府の考古局が発掘調査を実施したバン・ファキラン Ban Faqiran をはじめ、新たな重要遺跡も報告されている。



u9 マーニキャラ

2 バマール遺跡（小泉）

バマール遺跡（図k1）は、タキシラ博物館から東北に約18km、ハロ川を堰き止めたカーンプールダムを越えて川に沿って遡上し、右岸丘上に位置する。J・マーシャルが1930-31年に最初の発掘を実施²して以来、調査の手は及んでいなかったが、2012年よりハザーラ大学考古局、カイバル・パクトゥンクワ州政府考古・博物館局、米国ウィスコンシン・マディソン大学らが発掘を実施している³。

マーシャルは、東西に並ぶ塔院と僧院、主塔⁴が十字形プランをもつこと（図k2）、主塔基壇のストウツコ製涅槃像（図k3）⁵などを確認し、セミアシュラー積と呼ばれる石積法や出土貨幣などから造営を4-5世紀とした。

最新の発掘調査では、主塔の西側に長さ14mの大型涅槃像、新たな塔（主塔B）、この塔の三方を囲む祠堂列（Chapel）の存在が明らかになった。報告では、彫刻の出土品には石造作品は含まれず、ストウツコ、テラコッタ製が主であった。

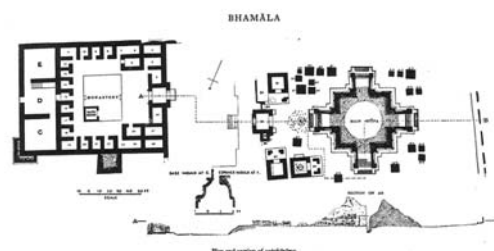
以下、涅槃堂、主塔B、祠堂列について概観し、十字形塔や大型涅槃像、仏像光背、テラコッタ彫刻について述べていきたい。

涅槃堂

主塔の西側に位置する。南北22.72m、東西7.56m



k1 バマール遺跡主塔



k2 バマール遺跡平面図
(Marshall 1951, pl.114)



k3 主塔基壇の涅槃像

の部屋で、東に開口部を3つ設ける。南北向きの長さ15.63mのプラットフォームに、頭を南に向けて横臥する大型の涅槃像を安置する（図k4）。像はカンジュール⁶の胎にストウッコで整形し、彩色を施していた。発見当初、枕、下半身の右足側を除く大部分が欠失していたが、現在では像全体の形状が把握できるほどにカンジュールを積み上げて修復されている。

プラットフォームの両端には凹みがあり、堂内南北端からはテラコッタ彫刻の断片が出土している。この彫刻の内部から見つかった炭化木片の放射性炭素年代測定では、3世紀頃との結果が出ている。

主塔B

涅槃堂の西側に隣接する。発見当初は、主塔と同様の十字形プランと見ていたようだが、実際は北側一方向に階段を付設する方形基壇の塔である（図k5）。基壇側面の北側階段左右と階段東側面の合計3カ所に、ストウッコ製涅槃像浮彫がある（原色図版22、図k6a, b）。1つの塔に3つの涅槃像を表すのはかなり珍しく、しかも片岩製浮彫でなくストウッコ製である点も注意される。また、階段踏み石に板石でなく厚みある石材を用いる点も特徴的である。

祠堂列

北面する主塔Bを取り囲むように、東、北、西の3面に祠堂が並び、各々に如来坐像を中心とした群像、各祠堂の凹みの間には仏立像があったと思われるが（図k5、k7a, b）、欠失箇所も多い。祠堂は東9、北6、西8ヶ所、仏立像の台座は合計25基を数える。現存する主尊の如来坐像は、着衣が通肩と偏袒右肩、印相は禅定印と転法輪印を作り分けている。

バマラとザールデリーの十字形塔

ガンダーラの仏塔は円形、方形基壇が多く、十字形プランの数は限られている。バマラの主塔はタキシラにおける唯一の例で、規模もザールデリー主塔に近い。両者は、石積の方法、片岩による部材の併用の有無などの違いから、ザールデリーがバマラに先行すると判断される。



k4 大型涅槃像



k5 主塔B（奥は祠堂列東側）



k6a 主塔B涅槃像(1)



k6b 主塔B涅槃像(2)(3)

ザールデリーでは、出土した石造彫刻のスイート地方の作例との比較や、カローシュティー銘文の文字の編年などから、彫刻や銘文のクシャーン朝早期の制作を想定した⁷。これらの遺物が主塔に安置されていたものであれば、主塔と遺物の年代を関連付けて考慮する必要がある、両者を近い時期とみることもできる⁸。

従来、バマララの造営は4・5世紀とされてきた。近年の放射性炭素年代測定では、涅槃堂の造営を3世紀とする。涅槃堂と主塔の造営の前後関係は、マーシャルによる建築技法、出土貨幣の研究なども踏まえれば、涅槃堂、主塔の順になる。



k7a 祠堂列東側

大型涅槃像と主塔、主塔Bの涅槃図

バマララでは、かつてマーシャルが主塔基壇南東側で発見した浮彫（タキシラ博物館、図k3）に加え、新発見の長さ14mの大涅槃像、主塔B基壇に付設の浮彫3体の合計5点のストウツコ製涅槃像が出土した。

主塔の浮彫は、横臥する釈迦の背後に4人、手前に4人の人物を配し、参集し嘆き悲しむ仏弟子他の姿を伴う、仏伝の涅槃図の群像構成をとっている。これに対して、新発見の4体のうち、主塔B付設の浮彫3点はいずれも釈迦単独の表現のようで、付随する人物の姿は確認されていない。一方、大型涅槃像は、



k7b 祠堂列東側中央（背屏付）

テラコッタ製彫刻が涅槃堂内から出土していることから、群像表現であった可能性も考えられる。

涅槃像に関しては、以下の4つの点が注意される。そもそもストウツコ彫刻でこうした仏伝を表す例は、仏伝説話の宝庫たるガンダーラにおいてもごくわずか⁹である。次に、等身を超える大型の涅槃像のガンダーラにおける最初の発見例である。第3に、一寺院から大小5つの涅槃像が集中して出土するという状況は、この寺院で涅槃図像が特に重視されていたことを示唆する。第4に、仏伝説話の群像の涅槃図と単独の尊格の涅槃像の2種が並存している¹⁰ことである。

K・バーレントは、ガンダーラ建築と彫刻の編年の中で、大型像を安置するのは自らの編年によるPhase IV（5・8世紀）の特徴とし、ラニガトのR301堂、ダルマラージカーのN18堂他、アッバ・サヒーブ・チナなどの例を挙げる¹¹。また、ガンダーラでは玄奘の訪れた7世紀には仏教が衰退していたが、こうした巨像をつくるための財政的支援をする余力は十分にあったと述べている。近年の放射性炭素年代測定の結果とこうした見解は時代的にかかなりのズレがあり、より慎重な検討を要するが、寺院の財政的基盤に加え、巨像の制作や涅槃像が選ばれた背景についても考えなくてはならない。玄奘を初めとする古代の記録には、ガンダーラの各地が仏伝や本生説話とゆかりのある地であると紹介されるものの¹²、タキシラ周辺で涅槃に関わる聖地の記述は見られない。しかし、少なくとも本寺院が営まれていた当時、この地域の涅槃信仰の一拠点であったことは想像に難くない。生前の釈迦が訪れる機会を持たなかった西北インドにおいて、仏伝や本生、仏足跡、仏影の聖

地が各地に作られていることとも関連してこの現象を考えることが必要であろう。

二重円相光の意匠

主塔Bの三方を囲む合計23個の祠堂のうち、東側列は残存状態が比較的良好であった。各区画には、如来坐像を中心に、如来、比丘、執金剛神など計9体が表現される。発掘者による報告でも主尊の二重円相光に着目した記述が見られるが、現地調査で気づいた点を追記しておきたい。

まず、東側中央のChapel 5では、他の二重円相光と異なり、身光部分が背屏となっている点が着目される（図k7b）。クシャーナ朝のガンダーラにおいても、如来坐像に加え、倚像、菩薩交脚坐像、さらにペシャーワル博物館の仏伝「占相」で中央に坐る王の椅子など、背屏の表現は一定数見られる¹³。

また、身光の意匠は、周縁に装飾文様がつき、素文の頭光と区別されている点が注目される。報告では、文様をビーズないし蓮弁と表記するが、連珠円文、楕円内に三角形や細長い文様を配するなど、像によって意匠を少しずつ違い、変化をつけている（図k8a, b）。タキシラのジョーリアン、モーラ・モールドゥなどストウッコ彫刻が多数出土している寺院の例をみると、身光の周縁部は素文であり、バマーラの意匠とは異なる。また、ガンダーラ後期とされる銅製如来立像¹⁴では、光背の周縁部を宝珠形の先端に円文を付した華やかな意匠とする例が多いが、それと比べて簡素な作りとなっている。



k 8 a 祠堂列東側北端



k 8 b 祠堂列東側北から3番目

テラコッタ彫刻

涅槃堂からは、テラコッタ彫刻が出土している。これまで、ガンダーラにおけるテラコッタ彫刻は、小像を除き、塑像が何らかの事情で完成後に焼成を受けたものと言われてきた。しかし、バマーラの出土品は土の焼成後に下地や彩色、金箔を施しており、これらの制作年代とされる3世紀頃に、ストウッコと並んでテラコッタによる彫刻作品が作られていた、とされる¹⁵。

大型涅槃像の足元から見つかったテラコッタ製人物像は、仏弟子のカーシャパを表した可能性が示される¹⁶。涅槃堂内からの発見であることから、説話と切り離れた造形というより、釈迦の周囲に参集する仏弟子たちとみることも自然な解釈である。

ガンダーラ美術の展開と再編年への課題

マーシャルの発掘から約90年を経て、バマーラでは大型涅槃像の制作、二重円相光の特徴的な意匠、テラコッタ彫刻の開始時期についての新知見など、重大な発見が相次いでいる。本稿はそうした事例の一部を紹介するにとどまるが、文献記録に残されていないこうした発見を元に、タキシラ

ひいてはガンダーラにおける古代の仏教信仰の様相と美術の展開について、従来の見解を含めて再整理していく必要があるだろう。

かつてマーシャルは、バマラをタキシラの中心部から離れた孤立した地と捉えていた。しかし、近年、本遺跡の近隣において仏教寺院址や石窟の存在などが確認されているという。彼の地に対する理解が今後より深まる新発見が期待される。

参考文献

- ・ John Marshall, *Taxila*, 3 vols. 1951 (rep. 1975, Delhi).
- ・ 桑山正進「タキシラ佛寺の伽藍構成」『東方學報』46、pp. 327-359、1974。
- ・ Elizabeth Errington et al, *The Crossroads of Asia, Transformation in Image and Symbol*, Cambridge, 1992.
- ・ W. Zwalf, *A Catalogue of the Gandhara Sculpture in the British Museum*, London, 1996.
- ・ 塚本啓祥『インド仏教碑銘の研究』平樂寺書店、1996。
- ・ 桑山正進「佛像出現ごろのタキシラ 層位と編年」『東方学』107、pp. 1-20、2003。
- ・ Kurt A. Behrendt, *The Buddhist Architecture of Gandhara*, Brill, Leiden, 2004.
- ・ Kurt A. Behrendt, "The Ancient Reuse and Recontextualization of Gandharan Images: Second to Seventh Centuries CE", *South Asian Studies*, 2009 (1), pp. 11-27, 2010.
- ・ 東京国立博物館パキスタン調査隊編『ザールデリーーパキスタン古代仏教遺跡の発掘調査ー』東京国立博物館、2011。
- ・ Abdul Samad, et al (1), "Preliminary Report of Bhamala Excavations (2012-13)", *Frontier Archaeology*, vol. 9, pp. 11-29, 2011, 2017.
- ・ Abdul Samad et al (2), "The Bhamala Buddhist Complex: A Review of Earlier Investigations at Bhamala", *Frontier Archaeology*, vol. 9, 1-10, 2017.
- ・ Abdul Samad et al (3), "The Largest Mahaparinirvana Statue from Bhamala", *Frontier Archaeology*, vol. 10-14, 2017.
- ・ Abdul Samad et al (4), "Structural Remains at Bhamala Exposed during the Second Season", *Frontier Archaeology*, vol. 10-14, 2017.
- ・ Abdul Samad et al (5), "Bhamala -New Chronology of the Site Based on Radiocarbon Dating", *Frontier Archaeology*, vol. 10-14, 2017.
- ・ Abdul Hameed et al (1), "Stucco Buddha Images surrounded by Double Haloes: Recent Discoveries at Bhamala (Taxila)", *Ancient Pakistan*, XXVIII, pp. 98-103, 2017.
- ・ Abdul Hameed et al (2), "The Origin and Development of Cross-planned Stupa: New Perceptions based on Recent Discoveries from Bhamala", *Gandhara Studies*, vol. 11, 2017.
- ・ Abdul Hameed, et al, "Bhamala Excavation 2015-16: A Preliminary Report", *Ancient Pakistan*, XXIX, 2018, pp. 171-184, 2018.
- ・ Waqar, M. & Ullah, M. "Excavation at the Buddhist Site of Jinnar Wali Dheri", *Gandhāran Studies*, vol. 12, pp. 95-104, 2018.
- ・ Abdul Hameed et al (1), "Discovery of the Earliest Monumental Parinirvana from Bhamala, Khyber Pakhtunkhwa (Pakistan)", *Journal of Asian Civilization*, vol. 43, no. 1, pp.1-21, 2020.

- ・ Abdul Hameed et. al (2), “Terracotta Sculpture from Bhamala, Taxila, Pakistan: New Insight on Kushan Manufacturing and Firing Techniques”, *Gandharan Studies*, vol. 13, 79-92, 2020.
- ・ 内記理「玄奘が見たタキシラの都城と仏塔」『オリエント』64-2、pp. 217-232、2021。
- ・ 内記理「タキシラ探索記」『愛知県立大学日本文化学部論集』15、pp. 136-111、2024。

註

- ¹ 今回の訪問地は、イスラマバード、タキシラ、ラホール、ハラッパ。本稿は以下の科学研究費による調査研究の成果の一部である。若手研究、打本和音「兜率天の初期相をめぐる基礎的研究」（課題番号 JP22K12976）。研究協力者：小泉恵英。
- ² Marshall 1951: vol. I , 391-397.
- ³ Samad et al (1)(2)(3)(4)(5) 2017, Hameed et al (1)(2) 2017, Hameed 2018, Hameed (1)(2) 2020等に発掘調査の概要が掲載される。本稿でもこれらを参照した。
- ⁴ 近年の発掘で新たに見つかった塔は主塔 B とされ、従来の主塔と区別しているので、本稿でもその表記に従う。
- ⁵ Marshall 1951, pl.118 a, b. 南階段東側の突出部 (Salient) 東面にあったもので、長 2 フィート 4 インチ (28.8cm、高 1 フィート 6 インチ (19.2cm)。
- ⁶ 地元で産出する石灰岩。多孔質で古代仏教寺院の建築部材として用いられている。
- ⁷ 東京国立博物館2011, 147-159.
- ⁸ もちろん、古い時期に作られた彫刻を後代に再利用して安置するなど、建造物と彫刻の制作時期が大きく隔たる可能性もある。ザールデリーの発掘報告では、巨大な三葉形仏龕を形成する石彫グループの安置場所として主塔胴部から覆鉢側面を想定した（東京国立博物館2011, 152-154. ）。
- ⁹ Behrendt 2004: 277-279.
- ¹⁰ ただし、単独像が仏伝の省略形として作られたとも考えられる。
- ¹¹ Behrendt 2004: 209.
- ¹² 内記2021, 218ff.
- ¹³ 大英博物館には、蓮華座上で偏袒右肩、転法輪印を結ぶ坐像が、円形頭光と方形背屏を組合せる作品がある (Zwalf 1996: pl.112.)。
- ¹⁴ Zwalf 1996: pl.18., Errington et al 1992 pl.211.など。W・ツォルフは光背意匠にバーミヤーン（6 - 7 世紀）との関連を指摘している。
- ¹⁵ Hameed 2000 (2).
- ¹⁶ Hameed 2020 (2), 82.

※写真画像はすべて筆者撮影

（こいずみ よしひで 九州国立博物館副館長）
（うちもと かずね 京都大学人文科学研究所 日本学術振興会特別研究員 PD）